



ソフィアドリーム

2021/07/11



エリー ELYE



目次

01	2019年5月のヨーロッパの片隅の玉ねぎ畑	1
02	アンティーク屋	3
03	不思議な夢	5
04	ルーシー	6
05	ふたり遊び	8
06	子ども時代のルーシー	9
07	事情	10
08	地下室	12
09	階段	13
10	ブブカ	14
11	ダイア	17
12	祝福の声	18
13	変化	19
14	目覚め	20
15	ルーシーの目覚め	21
16	お礼	22

01 2019年5月のヨーロッパの片隅の玉ねぎ畑

ここは文明の発達した現代においてけぼりにされたような片田舎の農場。

春の祝日はうっとりするほど心地よい。水色の空にはもこもことしたクリーム色の雲が漂っている。

うっとりする天気なのにソフィアはうんざりするほど広がる玉ねぎ畑で3時間も収穫作業に付き合わされている。学校に行くより早い朝6時半にたたき起こされたのだ。

今年13歳になるソフィアは、薄い茶色の髪を2つに分けて頭の高い位置でお団子にしている。カールした前髪は毎朝水で濡らして念入りに整えたチャームポイント。

明るい茶色の瞳は目の前の玉ねぎではなくスイーツを思い描いている。

黙々と働く祖母カタリナや母テレサとは対照的にソフィアの手はほとんど止まっている。

さっきからずっと同じ場所にいるのでカタリナもテレサもソフィアが怠けていることは分かっていた。分かっているのに黙っているのは、やる気になるのを待っているからだ。

けれどもソフィアは二人は作業に集中していて気づいてないと思い込んで安心して

いる。

「ソフィア、今日の分が終わらない。真面目にやりなさい」

「やってるよ！」

手を止め振り返ったカタリナがソフィアをじっと見つめる。

「本当に？」

「畑にいただけでもわたしは頑張っているの！」

「いいかい、ソフィア。人は遊ぶために生まれてきたんじゃない。魂を育てるために生まれてきたんだ。なにもしないまま死んだら後悔するよ」

呪文のように毎日繰り返されるお説教にソフィアはゲラゲラ笑い出した。

「玉ねぎを育てて収穫したら魂が育つの？ そもそも魂なんてあるの？ 見たことあるの？」

カタリナは反省しないソフィアを見て口で言ってもどうにもならないと悟る。3人いるから1人くらいやらなくても分からないと手を抜いている。それならソフィアを一人にしてやらざる得ない状況にもっていくしかない。

「ソフィア、先に帰って玉ねぎスープを作っておいて」

けれどもソフィアは「先に帰って」だけを聞いた。

「もう帰っていいのね！」

駆け出すソフィアに後ろからカタリナが声をかける。

「スープ！」

走り出したソフィアの耳にカタリナの声は届かない。

テレサが眉間にシワを寄せ、腹立たしそうにつぶやく。

「またあの新参者のアンティーク屋にいくつもりなんでしょう」

「怪しげな道具に興味をもって悪いことが起らなければよいが」

カタリナもテレサも追いかけてたいのはやまやまだが、二人でやらないと収穫が終わらない。二人は再び黙々と作業を始める。

ソフィアの父と兄は、都会に出稼ぎに行っていて、週末まで帰って来ない。二人が収穫の手伝いに帰る前に、少しでも進めて負担を減らしたい思いは一緒だった。

02 アンティーク屋

ソフィアはカタリナたちの予想通り、玉ねぎ畑を抜けると町はずれのアンティーク屋に向かっていた。

そのアンティーク屋は最近引っ越してきた女主人ヘレナが一人で営んでいる。

黒っぽい緑色の膝丈のワンピースを好んで着ている。裾がつぼんでクラゲのよう。

首元には鮮やかな紫色のスカーフを結んでいる。

毒色コーディネートにたいがいの人はぎよっとする。

けれども驚くのは服の色だけじゃない。後ろからみれば普通の黒髪ショートカットだが、正面から見ると目が隠れるほど長い前髪をしている。表情が分からず不気味な印象を与える。

町のみんなは怪しんで近づかなかった。しかしソフィアは学校帰りにヘレナが「お菓子を食べない？」と声を掛けて以来、入り浸っている。

ヘレナは思惑があってソフィアを手懐けていた。

遊び好きで慎重さの足りないソフィアならお菓子で思い通りに動かせるはず。

アンティーク屋を営むくらいだから、ヘレナは古いものにとっても惹かれる。たまに魔女が作ったという魔法の道具も手に入る。

そんな珍しい道具が安値で入ることには理由がある。よくないことが起きたからだ。

今日も不吉だから引き取って欲しいと木の枕が匿名で送られてきた。

問題を解決すれば大金持ちになれるチャンスと思っているところに、ソフィアがやってきた。

「こんにちは。今日は何を食べさせてくれるの？」

「ちょうどいいところに来たわ。紅茶のスコーンが焼けたところよ。香りの高いジャスミンのお茶をいれましょうね」

「ヘレナ大好き！」

無邪気に食べるソフィアを見ながら、ヘレナはどう切り出そうか頭を絞った。

「ここに来ることおうちの人に反対されてない？」

「ダメって言われても聞かない。だってお手伝いはちゃんとしたもん」

座っていただけなのに、やった気になっているソフィアは自信を持って答えた。

そしていつもの愚痴が始まった。

「おばあちゃんたら、ちゃんとやっているのに魂が育たないって怒るのよ。魂なんてあるわけないのに。いつの時代の話よ」

ヘレナはチャンスを逃さなかった。

「魂が本当にあるかどうか、知りたくない？」

「ヘレナもあると思っているの！　まさかおばあちゃんの味方？」

眉をひそめて不満げに見つめるソフィアを安心させるため、ヘレナはゆっくり首を横に振る。

「わたしには難しくて分からない。でも知ることができる道具を手に入れたの」

棚から木の枕を取ってソフィアに見せる。

「この枕を使って眠ると夢の中で知りたいことに答えてくれる。嘘か、本当か、貸してあげるから試してみない？」

「魔法アイテムなんてゲームみたいだね。それこそ魂より嘘くさい」

ゲラゲラ笑うソフィアが首を横に振るのを見てヘレナは焦る。

「嘘なら何も起きなんのだから悪いことは一つもないでしょ？」

「それはそうだけど……」

ヘレナから枕を受け取り胡散臭そうにあちこちひっくり返して見る。

「試してくれたらお礼に特別な焼き菓子を焼いちゃおうかしら……」

ソフィアの耳がピクリと動く。

「わたし、やってみてもいいかな」

「そう？　どんな夢を見たか聞かせてね」

残りのスコーンをゆっくり食べて、最後の一滴まで大切にお茶を飲み干すとあくびをしながら立ち上がった。ヘレナに枕を渡され無造作に抱えて帰っていく。

03 不思議な夢

満腹になったソフィアは眠くなる。カタリナもテレサもあと3時間は帰らない。警戒心の薄いソフィアは気楽に考えていた。夜まで待たないで今すぐ枕を自分の部屋で使ってみることにする。

枕はパウンドケーキ1本くらいの大きさに筒状になっている。両端は閉じられていて開かない。

振るとカラカラと木の実が転がるような音がする。

自分の枕を椅子に移して、木の枕をベッドに置いて横になってみる。

固くて痛いのかと思いきや、スポンジの枕のように柔らかく沈み込む。本当に魔法の枕かもしれないと少し怖くなった。

けれども焼き菓子が食べたいソフィアは目を閉じてみる。

外はまだ日が高く明るい。レースのカーテンの隙間から柔らかな日差しがぽかぽかと差し込み気持ちのよい眠りに誘う。

気が付くとソフィーは暗さを感じる。

次の瞬間、一瞬で爆発が広がり、あたりは真っ白く輝き眩しい。

光はどくんどくと脈打ち、受精卵のように分裂していく。そして内部に宇宙が見える。

太陽が生まれ、惑星が飛び散る。

ソフィアは理科の時間に見た太陽系のイラストを思い出す。

「これはいったい何なの？」

声を出そうとして何も聞こえないことに気づく。音が吸い込まれている。

振り返ると闇が迫り、体が半分黒い。

消える。

直感的に恐怖を感じた。

手足がつっぱり金縛りにあったように動かない。心音だけが骨に響く。

すると女のかすれた声が届いた。

「ここへおいで！」

鉄が磁石に引き寄せられるように見えない力に引っ張られて、光の中に飛び込んだ。

04 ルーシー

ソフィアは見渡す限り雲が足元に広がる不思議な空間にたどり着く。

空は鮮やかな水色で晴れ渡っている。

光とともにさっきまでの恐怖は消えて、もっと周りをよく見たい気持ちがワクワクさせた。

ところどころ崩れた柱が立っていて、ローマ神殿を思わせる。

ぐるりと360度見渡すとキラキラとまぶしい光が目に入った。

好奇心の強いソフィアは光をめがけて歩き出す。

輝きの正体はテントほどある美しくカットされたダイヤモンドだった。すぐそばに5歳くらいの小さな女の子が座っている。

女の子は眠ったまま笑っている。こくりこくり船を漕ぎ、ニヤリと笑うを繰り返す。

肩で揃えた金髪はふわふわと柔らかそう。前髪も長くて、7割をクロスさせたピンでとめている。セーラーカラーの白と青のパジャマから裸足がのぞいていた。小さな子どもなのに白色のペディキュアをしており大人の女の人のよう。

近づくとカッと目を見開き、ゲタゲタとバカ笑いをし始める。

ギョッとして逃げ出そうとするけれども体が動かず、女の子に腕をつかまれてしまう。

「わたしはルーシー。あなたはだあれ？」

「ソフィアよ。腕を離して」

「離したら逃げるの？」

(さっきの声とは違う。逃げた方がよいかも。なんて言う?)

焦って考えるほどルーシーの腕をつかむ力が強くなる。痛くてたまらない。

「逃げないわ」

「嘘つきはペチャンコよ」

「信じて！」

ルーシーの目をじっと見つめた。うすいブルーの瞳に自分が映っている。

女の子を落ち着かせるように自分に向かってゆっくり話した。

「わたしはここに質問しに来たの。だから逃げないわ」

ルーシーは瞬きを繰り返し手を離してくれる。

腕を見るとくっきりと小さな手形がついていた。あのまま握られていたら骨が折れていたかもしれない。

夢なのを忘れて、現実だと思い込み始めたソフィアは、本気で怖くなる。

恐怖が胸に広がるとだんだんなんのためにここにいるのか分からなくなっていった。

そして体が小さく縮んでいった。ルーシーと同じくらいの大きさになる。

05 ふたり遊び

何もかも忘れてしまったソフィアは、ルーシーと雲の絨毯を駆けまわった。ふたりぼっちで鬼ごっこを繰り返した。

ソフィアが鬼になりルーシーを捕まえる。次にルーシーが鬼になりソフィアを捕まえるに来る。

疲れることなく、飽くことなく、ひたすらに走り続ける。

悩みも不満もない心満たされた時間が過ぎていく。

そしてあたりが夕焼け色に染まる。

ルーシーが叫んだ。

「また夜が来る！」

あたりが群青色に染まり、あちこちから星々の光が集まってダイアに吸収されていく。

するとルーシーが大きくなった。

ソフィアも大きくなる。ここに来た目的を思い出す。

「わたしは魂の話を聞きに来たんだっ！」

ルーシーも同時に叫んだ。

「わたしは神さまに会いたいとお願いしたんだっ！」

顔を見合わせたソフィアは13歳に、ルーシーは20歳に姿を変えていた。

そしてお互いの話をする。

06 子ども時代のルーシー

「あの時のことを思い出すと今でも体が震えるの」

そう言ってルーシーは深く心に刻まれた場面を語る。

5歳になるルーシーはスタジオでバレエの練習をしている。

周りにたくさん子どもたちがいる。特に隣の子どもが先生に褒められていた。

壁際には大人たちが並んでいる。ルーシーの母親もいた。

(わたしのこと、お母さんが見ていてくれる。きっと褒めてくれる)

レッスンが終わると急いで母親の元に駆け寄った。

「隣の子も5歳なんだって。どうしてあの子のように上手に踊れないの？」

一番じゃないとダメだと悟ったルーシーは人の何倍も練習した。

ストレッチで体を柔らかくして、手先まで美しく踊る。自分でも上手になったと思う。

けれども12歳の発表会のプリマに選ばれたのはあの子だった。

母は見に来ない。

バレエを辞めたあとも、他にいろいろ習う。けれどもどれも一番にはなれず、失望した母親に冷たい視線を向けられる。

そしてとうとう20歳になり大人の仲間入りを果たす。

自信をなくしたルーシーは家から出られなくなってしまふ。

一番になれることが知りたいと願い、噂を信じて、ネットで知りたいことが夢に見られるという不思議な枕を手に入れる。

部屋の扉に鍵を掛けて、パジャマに着替えて、不思議な枕に横になる。

すると自分の体がどんどん上昇するのが分かった。

そして気が付くと輝くダイアのそばに座っていた。

07 事情

小さな女の子から大人の女性になったルーシーは、小さかった時とは打って変わって遠慮がちにぼそぼそ語りだした。

「わたしのお母さんは、人と同じじゃ認めてくれないの。誰もできないこと。わたししかできないこと。それがみつからないからわたしに失望しているの。でも探し続けて見つからないまま大人になってしまった」

しくしく泣き始めるルーシーをみて、ソフィアはかわいそうに思う。けれどもそんなことどうでもいいじゃないかと思えてならず、何を悩んでいるのかさっぱり分からない。「別に自分が楽しければよくない？」

出会った時と同じようにカッと目を見開くルーシーは小鬼のようだと思った。「全然よくないわ！」

立ち上がったルーシーはバレエダンサーのように踊りだす。「バレエも習った」

指先まできれいに伸びたシルエットを美しいと思う。「きれい」

「でもプリマになれなかった」

両耳をふさいで罵倒の声を防いでいるかのようにイヤイヤを始めたルーシーが声を上げて泣き出す。

「バレエもだめ、ピアノもだめ、水泳もだめ、料理もだめ。全部だめ。あなたにできることなんてあるの？ お母さん、やめて。言わないで！」

のんびり屋のソフィアでもさすがに心配になり、ルーシーの背にそっと手を置く。「夢の中まで悩むことないわ」

「現実に帰りたい。帰ってわたしを苦しめたお母さんをぶってやりたい。でも帰り方が分からないのよ」

ソフィアは耳を疑う。自然に目覚めると思っていたからだ。「ルーシーは何日ここにいるの？」

指を追って数える。「ここには昼と夜がある。それが1日なら、もう20日くらいいるかもしれない」

帰れないなんて冗談じゃない。そんな話は聞いてない。走り出すソフィア。

「待ってソフィア。そっちはダメよ」

追いかけて捕まったソフィアは身をよじる。「遺跡の方から夜になるとゴリゴリこする重い音がするの。何かか何かをしているのよ！」

「ぜったいそれが帰るヒントよ！」

腕組みして怒って見せるソフィアに母親を思い出したルーシーは思わずカッとしてソフィアの手を強く握る。

「いきなりいくななんて危険よ」

「痛い！」

ハッとして冷静になり、力を緩める。大人の自分がリードせねばと思う。

「きちんと計画しなくちゃだめよ。何事も完璧にやらないとだめ」

それもそうかとソフィアは納得する。

「じゃあ、どうするかルーシーが考えて」

「いいわ」

指を折りながら候補を挙げていく。

「まずこの辺り一帯の地図を作る。他に音が聞こえないか調べる」

「それじゃあ、今聞こえている音の正体は何も分からない。意味がないわ」

否定されてルーシーは衝撃を受ける。確かに、音の正体を確かめるためには、近づくしかない。

「結局、行って確かめるしかない。だってなんにも分からないのにどう計画するの？」

計画が分かったらとっくにルーシーは帰れているんじゃない？」

言い返すことができないルーシーは、ソフィアの手を離す。

飛び去るソフィアを追いかけてルーシーも行く。

08 地下室

屋根を失った神殿には星の光が降り注いでいる。
崩れた柱の間には瓦礫が散乱していて床が見えない。
音を聞くため、立ち止まりながらソフィアが歩く。

「どっちから聞こえたの？」

奥を指すルーシーの指が震えている。

「最初の日には聞こえなかった。3日目にこの辺りにまた来たら聞こえて……」

迷わず歩き出すソフィアに引きずられ、ルーシーも行く。

……ゴリゴリゴリ、ゴリゴリゴリ、ゴリゴリゴリ。

だんだん大きくなる音は、一定の間隔を開けて規則的に繰り返している。

「誰かいるの！」

大声で叫ぶソフィア。悲鳴を上げるルーシー。

音が止まる。

「か・え・れ！」

あの時、闇から連れ出してくれたかすれた声が聞こえた。敵じゃない。そう確信したソフィアは大胆になる。

「声は下から聞こえた。地下につながる入口があるはずよ。わたしは壁を見るから、ルーシーは床を探して」

「でも帰れって……」

ゲラゲラ笑いだすソフィアを見て、またびっくりしてしまう。

「大丈夫よ。心配性ね。今はわたしの勘を信じて」

ルーシーは勢いでうなずいてしまう。

壁の模様を手で探り、ソフィアはでっぱりをでたらめにおしていく。

ピキン！

音とともにルーシーが立っていた場所が開き、悲鳴とともに落ちていく。

ソフィアは入口が見つかってよかったと思う。

09 階段

穴を覗くと階段がある。ソフィアは真っ暗な階段を下りていく。

「痛い！」

同時にソフィアとルーシーが叫ぶ。倒れているルーシーを踏んだソフィアがつまずいたのだ。

あまりに暗くて、互いの姿が全く見えない。

「手足で探るのよ！」

ソフィアが叫ぶと二人とも手足で探って、互いの位置と壁と階段の場所がだんだん分かってくる。

「上から来たんだから下へ行けばいい」

「でもまた落ちたら！」

「わたしが足で探っていく」

壁に手をつけ、転ばないように先にソフィアが階段を下りていく。

10分は歩いた気がする。

先を歩くソフィアは音の正体が知りたくてワクワクしている。

ついていくルーシーは戻りたいと言うのをこらえている。絶対戻らないというからだ。こんなところで一人になるのは耐えられない。

壁がぐるりとカーブを描いた。同時にあたりがうっすら明るくなる。

さらに5分歩くと扉から光が漏れている。

10 ブブカ

木の開き戸を開けるとあまりのまぶしさに二人とも目がくらんだ。
「とうとうきちまったね。まったく商売の邪魔だよ」
目を凝らすと黒い服を着たまるまる太った赤毛のおばさんがいた。
「ここはどこなの？ わたしたちを帰して！」
質問とお願いを同時に言うソフィアを見て、ルーシーは怒鳴られることを覚悟した。
どちらもルーシーには許されないことだったからだ。
「ここは精神世界の入り口。帰れないところを見ると怪しい道具に頼ってきたね。バカな迷子ちゃんだ」
ソフィアは怯まない。
「おばさんは自分の力できたの？ どうやって？」
肩をすくめる女を見て、ルーシーは怖い人じゃないかと思う。
「わたしはブブカ。迷子ちゃんたちの名前は？」
ジロっとソフィアを見る。ニッコリ笑って答える。
「わたしはソフィア」
次にルーシーを見る。縮み上がって小さな声で答える。
「わ、わたしはル、ルーシー」
恐れを知らないソフィアはもう一度聞き直す。
「ブブカはどうやってここにきたの？ 枕じゃないの？」
「呼吸法を極めると天に意識を登らせることができる。ここに物を持ち込むのは簡単じゃないがね」
好奇心でいっぱいになったソフィアは、帰るために探しに来たことをわすれていろいろ聞き始める。
あたりを見回すと大きな石臼がある。ゴリゴリの正体はこれだ。
「すりつぶしてなにしてたの？」
「薬草で魔女の特別な薬を作っていたのさ。それなのに邪魔しに来て本当に迷惑だ」
すりつぶされた薬草をソフィアが触ろうとするのでブブカが慌てる。
「触るな！ 邪なものが触れるとパワーが薄れる」
振り返ってブブカを見ると、カタリナが怒りを爆発させる時と同じ目をしていたのでソフィアは手を引っ込める。
「まだ触ってないよ。あのね。わたしね。ここには魂が本当にあるか聞きに来たの。おばあちゃんがいつもわたしに魂が育たないって怒るから」

「ルーシーは？」

ブブカがルーシーを顎で指す。

「わたしは、神さまにわたしだけができることをくださいってお願いしに来ました」

肩をすくめるブブカを見て、ソフィアもルーシーも顔を見合わせる。

「迷子ちゃんたちは昼はどんな姿をしていたんだい？」

「わたしたち知らない間に体が縮んで5歳くらいの女の子になって鬼ごっこしてたの」

「ガッハハ！」

バカにされたことが分かったソフィアとルーシーは意味を知りたくなる。

「どうして笑うの？」

「ここは精神世界の入り口。昼の間は精神年齢の姿になる」

ルーシーは衝撃を受けた。20歳のわたしが5歳の子どもなんて恥ずかしい。

ソフィアは何とも思わなかった。子どもの心を忘れてないだけだと思う。

「力が強くなったり、弱くなったりしなかったかい？」

「したわ。ルーシーに腕を折られるかと思った」

ルーシーはびっくりする。まったく覚えていなかったから。

「精神が影響するからね。怒って攻撃的になれば強くなる。心配して慎重になれば弱くなる。ここは心の形が大きく影響するんだよ」

「へえ！」

面白いと思ったソフィアは怒って強くなってみたいくなる。

「感情をコントロールできなくなれば、自分で自分を破壊することになる。ここでは冷静でいることが肝心さ」

見透かされるように忠告を受けてソフィアは考え直す。

素直な自分を知ったルーシーは成長してない姿を恥じる。

神妙な二人の様子を見て、ゆっくりとブブカが語りだす。

「この世界はグリーンさまと呼ばれる超自然の神さまの体内なんだ。魂とは、グリーンさまが生きるために必要な糧。ソフィアのおばあちゃんのいうことは正しい」

「見たことあるの？」

疑いの眼差しを向けるソフィアにブブカは笑いながら答える。

「闇に包まれた光の塊を見ただろう？ あれが虚無に包まれたグリーンさまの姿さ」

「どうしたら会えるの？」

ずっと黙っていたルーシーが自分から話し出したので、二人とも振り返った。

「ダイアに触れて、波長を合わせれば、グリーンさままで意識を引き上げられる」

「わたしやってみたい。だからそのソフィアも……」

はっきり言えないルーシーを見て、ちょっと意地悪な気持ちになる。

「あとで何かくれたらいいわ」

「……わかったわ。考えてみる」

行くと決まったら安全第一。ソフィアはブブカを頼ることにする。

「ブブカも来てくれるでしょ？」

引き出しを開けたり絞めたりしているブブカは背を向けたまま答えた。

「ここにいられたらかなわないから帰す薬を探していく。階段の明かりはつけたから先に

行って触れみな」

二人ともうなずき、扉から出て行った。

11 ダイア

二人は明かりのついた階段を上り、星の光を受けて輝くダイアを目指す。

覗き込むとキラキラと光が乱反射していてくらくらした。

手を伸ばすソフィアに慌てたルーシーは早口に言う。

「いきなり触って大丈夫？」

心配性のルーシーがやるべきことを探して空回りし始めたことを悟ったソフィアは、そっと手を差し出した。

二人は手をつなぎ、空いた片手をダイアに近づけた。

「怖い」

「3つ数えるから一緒に触ろう。1、2、3！」

勢いに飲まれてルーシーがダイアに触る。同時にソフィアも触っていた。

ソフィアはぐんぐん上昇して太陽になり、宇宙になり、天使を見た。

からだの大きさがどんどん広がっていくのが分かる。

そして不意に何も感じなくなる。

誰もおらず、何もなくて、熱もなく、光もなく、無音。

荒涼とした暗闇だけが広がっている。また飲み込まれて闇に消えるのではないかという恐怖を感じる。

するとブブカのかすれた声が響く。

「意識を外に向けるな。体内を感じろ！」

言われるままにソフィアは意識を自分自身に向けた。

脈打ち、蠢き、熱くて、騒がしい。

ああ、あなたはわたし。わたしはあなた。同じもの。

わたしの成長はあなたの活力。

あなたの健康はわたしの健康。

わたしこそが神だったのだ。

12 祝福の声

ルーシーがダイアに触れるとたくさんの意識が流れ込んできた。
カメラを引く感じに似ている。小さな世界がすべてだと思っていたら、それを包むもう一つの世界があって、さらにまた包む世界があってを繰り返している。
そして、最後に何もなくなった。
振り返ると光に満ち溢れ、脈打つ存在が目に入った。
理科で見た単細胞生物に似ている。
物質と生物の間にいるそれがブブカのいうグリーンさまなのだろう。
なんと壮大で立派な神なのだろう。
グリーンさまは幸あれと願い、すべてを祝福していると感じられて涙が出た。
特別じゃなくていいんだ。
わたしはわたしですでに神でもある。
生きてるだけで役立っている。
喜びの涙を流し、生まれて初めて満たされた気持ちを感じた。

13 変化

ダイアに触れて恍惚の表情を浮かべるソフィアとルーシーのつないだ手にブブカはそっとナイフを当てる。

弾かれたように後ろに倒れる。

先に目を覚ましたソフィアは自分の手を見て神から人間に意識を戻したことを知る。

涙を拭いて微笑むルーシーは自信に満ちた目になっている。

「二人ともいいかい。グリーンさまの話はまだ言ってはいけない。人間が知る段階にないからね。嘘つきだと言われるだけだよ」

分かると思ったソフィアは素直にうなずく。

母親に反論する材料にしたかったルーシーは残念そうにうなずく。

「さあ、帰る時間だ。この薬を飲むといい」

コップを渡し、水筒から薬草の匂いのする緑色の液体を注ぐ。

「待って、まだルーシーから何ももらってない」

ルーシーはハッとする。

しばらく考えた後、ルーシーは数字を口にする。

「なんの数字？」

「わたしの携帯の番号よ。掛けたら夢が本当だって分かるし、美味しいものを送ってあげられるわ」

「覚えられない」

舌打ちするブブカ。

「手がかかる迷子ちゃんだ。ほらこの紙に書いて飲み込め。目覚めたら思い出す」

ルーシーが急いで紙に書くと、ソフィアが躊躇せず思い切って飲み込んだ。

コップの薬で乾杯するとゆっくり飲み干した。

14 目覚め

目が覚めたソフィアの頭にくっきり数字が見えた。

スマホを押す度、数字は消えていく。最後の1文字を押すとコールボタンを押した。

2コールでルーシーの声が聞こえた。

「ハイ、ソフィア。わたしはルーシー。覚えてる？」

「もちろん、全部覚えている！」

声を聞きつけたカタリナがソフィアの部屋の扉を開ける。

怒鳴られると思ったら、抱きしめられてびっくりする。

「もう目覚めないかと思った。よかった。本当によかった。おかしい枕なんかして、あの女に騙されたんだろう？ 隠さなくてもいいから言ってごらん」

赤い目をしたテレサが声を聞きつけやってくる。

後ろには青い顔をしたヘレナが立っている。

そっと電話を切るソフィア。

電話を不審に思ったがあえて問わずにカタリナは優しく話しかけた。

「お腹すいたらろう？」

「うん、今何時？」

話しながらみんなで台所へ向かう。

15 ルーシーの目覚め

ソフィアが目覚めた頃ルーシーも無事に夢から現実に戻っていた。

スマホの着信音にソフィアからだと確信する。

挨拶して名乗るとやっぱりソフィアだった。

夢だけど夢じゃない。真実なのだとか確信して、再び満たされた気持ちになる。

いろんな人の声が聞こえて、電話が切れてしまった。

電話番号は分かっている。夜が明けたらゆっくり話せばいい。

ベッドから立ち上がろうとして、力が入らない。

どうやらずっと動かなかったために、筋力が落ちてしまったようだ。

家具や壁につかまり、部屋から出る。

居間から母親の声が聞こえてくる。

床を這って居間へ向かうと、気がついた母親が冷ややかにルーシーを見た。

「あらやっと出てきたの」

「お母さんは何でも知っていて正しいと思っていた。それは間違い。何も知らない。わたしのほうが今は真実を知っている。わたし、この家を出るわ」

「あなたには無理よ」

いつもなら真実として受け止める否定の言葉も、今は言い返せる。わたしたちは神に祝福された存在なのだから、産みの親がどんなに否定しても、わたしは神に肯定されている。

もう許しを求めることもない。

わたしはわたしの人生を生きよう。

16 お礼

あたためた玉ねぎスープとパンをソフィアは食べていた。

アンティーク屋がおかしなものをよこしたからなのは間違いない。だが「疲れて寝すぎただけ」というソフィアをそれ以上責めることはためらわれて、カタリナは黙ってしまった。

「夜も遅いですし、わたしはこれで」

ヘレナが席を立つと、ソフィアが「お見送りするわ」と立ち上がる。

玄関の外に出ると、ソフィアが耳元にささやく。

「戻る方法がないから枕は使っちゃダメって。明日行くからお菓子忘れないでね！」

「かばってくれてありがとう。いっぱい作って待っているわ」

扉を開けるとカタリナが立っていた。

「何を話していたんだね？」

「いつもお菓子ありがとうっていっただけだよ」

眉間に皺を寄せるカタリナの隣をすり抜け、ソフィアが残りを食べに戻る。

後に続くカタリナは、都会に出稼ぎに言っている父や兄には心配させないように黙っておこうと思う。

いつもならお皿も片付けずに部屋に戻ってしまうソフィアだが、今日は何も言わないのに運んで洗い始めた。

「どういう風の吹き回しだい？」

「神さまのために食べたお皿は洗うことにしたの」

カタリナはソフィアに何かあったことは間違いないが、悪いことではないのかもしれないと思う。

それはテレサも同じで、少しだけソフィアの成長を感じていた。

ソフィアは、ヘレナやルーシーがなにをくれるか楽しみで仕方がなかった。わたしの幸せは、神さまの幸せ。幸福は魂を育てるために役立つに違いない。

遊び好きは変わらないが、少しだけ自分が動くことも学んだルーシーを見て、グリーンさまはそれもよしと微笑まれた。

ソフィアドリーム

著 エリー ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
